

## 胎内の夢

セサル・アイラ著、柳原孝敦訳

## 『わたしの物語』

松籟社 二〇二二年七月

誰かが私の名前を呼んでくれることは好きです。(14)

セサル。主人公の名前だ。主人公曰く「わたしの物語」は「わたしがどのように修道女になったか」という物語だそうだ。〈わたし〉の物語は「すてきなピンク色」をしたイチゴのアイスクリームから始まる。

『わたしの物語』は、溶けて流れ出すアイスクリームをじつと見つめるような、ゆつくりとした語り口が心地よい。六歳の主人公〈わたし〉は、夏の思い出から夢や病院、学校、ラジオ、「ごっこ」遊びなどの記憶を語るのだが、あまりに自在に妄想と現実の間を行き来するため、読み手の意識をすりとかわして、言葉の隙間から流れ出ていってしまう。そう、気をつけていないと、語り手は〈わたし〉という容れものからも漏れ出してしまわないだろうか。容れものの中から語りかけられる一連の記憶は、胎内の夢のような。胎児が晴れて「現在」に生まれ出てくると、眼前には「それまで」と「これから」の数多の物語の大海原がひろがっている。『わたしの物語』は、胎内から現実を夢見た、ひとりの人間が生まれる前の物語なのではないだろうか。

六歳になったばかりの頃、〈わたし〉は田舎町からロサリオという街へ引越してくる。〈わたし〉曰く、「その前の街のことは何も覚えていない。」引越してすぐに、約束通り父親がアイスクリームを食べに連れて行ってくれるのだが、〈わたし〉は「はじめてのアイスクリーム」という子供の通過儀礼をまつとうすることができない。父親の「うまいぞ」、という言葉に反して、〈わたし〉はイチゴのアイスクリームを吐き出してしまふ。アイスが嫌いな子どもなど信じられない父親は、〈わたし〉にアイスを食べるよう強制する。いくら変わった子だからとはいえ、息子がアイス嫌いななんてことはあり得ない、と。

はじめてのアイスがおいしくなかったことの波紋は大きい。アイスの味がおかしいことに気付いた父親は、自分が息子と共有するはずの、美味しい「はじめて」が侮辱されたことに怒る。アイスクリーム屋に怒鳴り込み、最終的に店主の頭をアイスクリームの入った缶に突っ込んで殺してしまう。その結果、父親は禁固八年の刑に処されることとなる。一方の〈わたし〉は入院する。アイスによる食中毒で生死の境を彷徨い、錯乱状態に陥るが、奇跡的な回復を遂げ、退院後、母親とふたりの生活が始まる。入院のため三カ月遅れで就学するが、学校でも「変わった子」セサルは、教師から嫌われてしまう。家では母とふたりでラジオを聴いたり、ひとりで「学校ごっこ」をしたりして過ごし、母親の買い物についていくときには、母親を相手にひとりで「尾行ごっこ」に没頭し、果てにはその遊びを「尾行されごっこ」に発展させ、〈わたし〉は現実と妄想との複雑な往復を楽しむ。

〈わたし〉はロサリオに来る以前、プリングレスという街に住んでいた。

開かれた空間がほしいと強く願うようになりました。ちょうどプリングレスで体験していたような空間です。もつとも、わたしにはプリングレスでの思い出はありませんでした。(中略)でもプリングレスでの開かれた空間というのは思い出ではありませんでした。欲望だったのです。一種の幸福感で、(中略)ただ目を開けて、手を延ばせばよかつたのです……

その空間、その幸福感には色がありました。ピンクです。夕焼けのピンクです。大きくて、透明で、遠いピンク。(129—130)

透明度の高いピンクに満たされた空間に手を延ばせば、指先から包み込まれてゆきそうな幸福感。〈わたし〉は空間に、奥行きに、心惹かれる。〈わたし〉は看護婦のジェスチャーや入院している子供たちと観たマイム劇、学校で習った文字や落書きといった、「音のない言葉」や「言葉のものまね」に対しては「耳が聞こえない」。紙上や視覚的な現実だけでは、言葉が平面的でつかみどころがないと感じている〈わたし〉にとって、必要なのは音声による言葉で、音声が言葉に奥行きをつくりだす。「わたしの物語」を語る〈わたし〉にも、奥行きのある「わたし」という言葉が必要だ。「わたし」という仮想の存在は、つねにみずからの措定と他者による対象化にさらされる。「わたし」という存在が、様々な「面」で切り取られることは避けられなくとも、そのあとに空間が残されているなら、自分や他人が「わたし」という存在を掬いきれなくとも、思わず残りを切り捨てたままにしてしまうこともない。存在の掬いきれない部分は、ラジオ放送がつくり出す共有空間を満たす言葉のように、自分という存在を共有する空間のどこかに残

滓として漂い、自分をとりまく時間と記憶の海の一部となる。大きなものの一部となる安らぎに、〈わたし〉は手を延ばし、羊水に守られるかのように、とつぷりと、無数の語りの中に溶け込んでいく。

物語の海の一部となつた「わたし」は、消えるわけではない。存在は、名を呼ばれば、呼び寄せられ、自らの名において結晶するような自由を夢見る。ただしその結晶は、一度として同じ姿をとることはない、という不自由さも持ち合わせている。

自由と不自由を併せ持つている名前を、「呼ばれるのは好きだ」と〈わたし〉は語る。名は、その名を想う者を縛る。言ってみれば呪文の言葉だ。自由でありたいけれど束縛もされたい孤独感のために、〈わたし〉は現実の表面と奥行きとを行ったり来たりする。胎内の〈わたし〉は羊水の中にひとりきり、名前を呼ばれるのを待ちながら夢をみる。

〈わたし〉の名前である「セサル」は、本作の著者セサル・アイラ César Aïra (一九四九—) と同名で、本作品は自伝的小説とされている。『わたしの物語』はアイラの初めての翻訳であるが、アイラはアルゼンチンのベテランの作家で、その著書は七十近くある。一九九二年の作品『試練』*La prueba* は、二〇〇二年にデイエゴ・レルマン監督によつて映画化されている(『ある日、突然』*Tan de repente*)。雑誌等で紹介されているものも含め、日本で翻訳されている作品は数えるほどしかないが、アイラについては訳者あとがきに詳しく紹介されている。その中の言葉を借りると、『夢』という作品で最初に日本にアイラを紹介した安藤哲行氏は、「聖俗入り乱れる状況劇を予感させて始まりながら、探偵・推理小説へ、さらにはSF風の荒唐無稽の物語へと展開」する作品の特徴

を「かたすかし」という言葉で表わしている。この「かたすかし」の感覚については訳者が述べている通り、「かたすかしの喰らわせ方が実に面白く、読者としては、失笑なのか哄笑なのか嘲笑なのか、嬌笑なのか、ともかく、舌打ちでもしながら、してやられたと笑うしかない」。

アイラはイタリアアのSFの草分けとも言える、エミリオ・サルガーリ Emilio Salgari (一八六二—一九二二) の作品を読んでいたそう。世界の海を股にかけあらゆる土地を冒険するサルガーリと、現実と実存の表層と深層を自在に動き回るアイラ。どちらも危険と隣り合わせだが、冒険家にとつてのスリルと同様、アイラの巧妙な語りを与える刺激に、読者は嵌まり込んでしまうだろう。

(石井沙和)